

## 【学会レビュー】

## 日本ギaskell協会第28回大会

2016年10月1日（土）東北大学東京分室（サピアタワー10階・会議室AB）

松村 豊子\*

2016年10月1日に東北大学の東京分室において、第28回日本ギaskell協会大会が開催された。

ギaskell（1810～65）はイギリスが産業革命後の繁栄を極めたヴィクトリア朝時代に社会問題を取り上げた作家である。日本では労使間の労働争議を主題にした『メアリ・バートン』が広く読まれており、日本ギaskell協会も英文学が英語教育に不可欠な科目と認められた数十年前に発足し、機関誌『ギaskell論集』を年1回発行している。生誕200年に当たる2012年に焦点を当てた近年の協会活動は目覚しく、2000年から2006年にかけて長編小説の邦訳全7巻を、2008年には中短編小説・ノンフィクションの邦訳全2巻を出版し、この邦訳の刊行と並行して2010年には論文集『生誕200年記念エリザベス・ギaskellとイギリス文学の伝統』、また、2015年には『没後150年記念エリザベス・ギaskell中・短編小説研究』を発行した。これらの記念論文集にはイギリスのマンチェスターに本部をおくギaskell協会（The Gaskell Society）の支援もえ、海外の研究者の論文も収められている。イギリス本部は機関誌 *The Gaskell Journal* を年1回発行しており、近年は本部の機関誌に投稿する会員も少なくない。

日本ギaskell協会と本学との関わりは深く、2011年の第23回大会は本学で開催された。その際、歴代会長をされていた諸先生方から要請があったシンポジウム（女性と労働に関するテーマ）

を今回、現会長の鈴木美津子氏（東北大学名誉教授）と現事務局長の石塚裕子氏（神戸大学大学院教授）を初め、関係者皆さまのご支援ご協力をえて、企画実施できたことに感謝申し上げたい。

今回のプログラムはシンポジウムと講演会の二部構成であった。

◆まず、シンポジウムについて述べる。統一テーマは「モダンの萌芽を探して——女性、労働、ホーム」。ヴィクトリア朝に絶大な人気を博したギaskellはモダニストたちが活躍した20世紀以降、独立心に欠ける二流作家として論じられることが多い。しかしながら、〈女性〉〈労働〉〈ホーム〉に関する時代思潮が地球規模で刷新される今日の状況を鑑みると、労働者への理解と共感において秀でたギaskellが従来言われてきたような「美しい」「dove」ではなく「偉大な」「eagle」の1人と解釈できる可能性が大である。シンポジウムでは発表者4名がそれぞれの視点からこの可能性について論じた。

(1) 発表者：松村豊子（江戸川大学）、タイトル「ギaskellは〈自分だけの部屋〉を望んだのか？」。

ギaskellとモダニストの旗頭であるヴァージニア・ウルフ（1882 - 1941）とを比較する立場から、『北と南』（1854 - 5）をヒロインの教養小説（感情教育）として読み、ヒロインが最終的に希求するのがウルフが提唱する「自分だけの部屋」を越えた「自分だけの家」とも呼べる地域社会への貢献であることをギaskellとウルフの作品・日記・手紙をもとに検証。女性が作家になる

2017年1月18日受付

\* 江戸川大学 情報文化学科教授 英文学、英語教育

には年収500ポンドと「自分だけの部屋」が必要であるというウルフの説を念頭におくと、成長が期待されるヒロインの性格付けは以下の4点になる。①知性と教養の点で、作品の主要舞台である新興産業都市よりも歴史ある学問の町オックスフォードに相応しい、②彼女の積極的な言動はヴィクトリア朝の典型的なヒロインとされる「家庭の天使」(Angel in the House)でなくギヤスケル独自の「力強い慰めの天使」(Strong Angel of Comfort)のものである、③階級差を越えて、労働者とも「秘密、嘘、沈黙」を共有する「心の友」となる、④階級・地域・宗教・性の文化的な差異に拘らず、時には非合法的な言動をとる自身の混乱した内省を顧みる「自分だけの部屋」に限定されない、他者との絆を培う時間と空間が作者によって準備されている。従って、ビジネス・パートナーの形をとるヒロインの結婚は、孤児と似た環境で成人したギヤスケルが結婚し、作家になることで「自分だけの部屋」を脱し、「自分だけの家」の構築を目指した証と考えられる。

(2) 池田晶子(江戸川大学客員教授), タイトル「新たなライフデザインを探して:『妻たちと娘たち』をガーデンデザイン(造園)から読む」。

最後の未完の作品である『妻たちと娘たち』(1864-6)をガーデンデザインの視点から読むと、ギヤスケルが当時草創期にあった造園ビジネス・文化(19世紀後半に確立する分野)に精通し、人物造形と背景に積極的に取り入れていることが分かる。物語展開の主要な場面である貴族の庭園では度々園遊会が催され、階級を超えて地域社会の人々が出会う。この庭園に関する詳細な描写を読むと、これが当時流行の庭園技術を駆使したものであり、尚且つ、当時初めて考案された「フローラル・デザイン」(花を①decoration ②dressing ③gift givingとして使用する)はヒロイン等々の主要人物の性格を表わすのに効果的に活用されている。ギヤスケルは多様な草花のやり取りをとおして、社会的な制限が多く、抑圧を余儀なくされた女性たちの感性の差異(グローバル時代の現代にも通じる)を読者に伝えている。造園に対するモダンな姿勢は、結局、ギヤスケルがビジネス

感覚に優れた作家であることを明らかにしている。

(3) 鈴木哲平(江戸川大学専任講師), タイトル「GaskellとBowenにおける‘home’——Mary BartonとLast Septemberをとおして」。

人間が心の安らぎを得られる場所を‘home’と定義し、ギヤスケルの処女作であるMary Barton(1846-8)とアイルランド出身のElizabeth Bowen(1899-1973)のLast September(1929)を比較し、ヴィクトリア朝時代からモダニズム期への変化の1つが‘home’に対する希望の喪失であることを検証し、「輝かしい」モダニズム後の今日のグローバル化時代においても‘home’の不在、不要を主張し続けることが難しく、逆にギヤスケルが提唱する‘home’の希求こそが普遍的と考えられる点について考察した。‘home’の喪失により、土地の縛りから解放され、人々は国境・言語・文化の境界線を軽やかに超え、未踏の土地の探索よりも、むしろ人間の内面の探求へと向かうことができたが、近年の世界的な政情不安を鑑みると、‘home’は古くて新しい意味を帯びるように思われる。具体例として結末を比較すると、Mary Bartonでは父親の死亡後、ヒロインは結婚し、新大陸カナダへ一家で移民し、幸せな家庭を築く一方、アイルランドではプロテスタント教が衰退するのと時期を同じくして‘home’への憧れは希薄になるが、このような時代背景を反映してか、Last Septemberではビッグハウスは炎上し消滅する。Mary Bartonは‘home’の希求が人間にとって普遍的なものではないかと、時代を超えて我々に問いかけてくる作品である。

(4) 松永典子(帝京大学専任講師), タイトル「ヴェラ・ブリテン『若者の証』における<働く>女性の<成長>小説」。

ウルフやボウエンとほぼ同時代を生きながら、彼女たちとは異なり、オックスフォード大学へ進み、第一世界大戦では救急看護奉仕隊に参加し、戦争を体験し、その後作家になったヴェラ・ブリテン(1893-1970)の自伝『若者の証』(Testament of Youth 1933)——2015年に映画化、邦題は『戦場からのラブレター』——を中心に読み、シンボジウムの統一テーマにおける<女性>を

＜フェミニズム＞に、＜モダン＞を＜ポストモダン＞に読み替え、また、教養小説を女性体験の共有を可能にするジャンルととらえ、ギaskellの世界の現代における意味について考察した。ギaskellが活躍したヴィクトリア朝はフェミニズムの視点からみると、政治的な権利を求めた19世紀半ばから20世紀初頭の第1期フェミニズムの時期であるが、ギaskellの地域社会への類まれな関心・貢献や感情労働（ケア）への注視は1960年代後半から70年代にかけての法制度的な側面の改善という第2期フェミニズムの時期を越えた今日的なポストフェミニズムの時期に分類される。ギaskellがブロンテ家から依頼されて著した『シャーロット・ブロンテ伝』に言及し、女性作家に果たして自伝が書けるのか、女性が伝記において金銭的な事柄を説明できるのか、読者はどのようなフェミニズムの時期にいるのか等々の話題を提供した。

◆次に、シンポジウム終了後の講演について述べる。

講演者：阿部公彦（東京大学准教授）、タイトル「小説家の礼儀作法」。

近年刊行された著書『善意と悪意の英文学史』について—— Austen, Carroll, Hawthorne, D. H. Lawrence, Faulkner』（東京大学出版、2015年）に言及しつつ、英文学史（特に17世紀に勃興した小説）と読者との関わりに着目し、英文学における「ポライトネス」（politeness）とメディアと

の関係性という視点から、ギaskell文学の特質を「遠慮」、また、彼女と同時代の作家であるジョージ・エリオット（1819-80）文学の特質を「我」として明らかにした。ギaskellの『メアリ・バートン』とエリオットの『ミドルマーチ』（1871-2）を上記観点から読み比べ、「善意」とは相手を語り尽くのではなく、接近してなお語り尽くせないシンパシーを抱き、リスペクトする相手には接近への衝動とその挫折のブレンドしながら語ることであるとの結論に達した。語り手と登場人物の「人間関係」に注目しながら文学作品を読むと、語り手の周辺には通常の人間関係と同じような「礼儀作法の圏域」が生きているのではないかと、また、書き言葉としての英語におけるスペリング、パンクチュエーション、構文、語彙、話題の選択は立派な「作法」であり、このような密な関係性は現代のtwitterの効能にも見受けられるという説は非常に説得力があった。文学と現代のメディアとの関連性の新しい可能性を示唆する講演であった。

◆シンポジウムと講演を終えた後、東京駅地下の「神戸屋レストラン」丸の内店で懇親会があった。大会会場では語り尽くせなかったことを「遠慮」と「我」を交差させながら、英文学だけでなく英語教育の展望について語り合った。また、2017年にギaskell協会による発行予定の論文集についても話が弾んだ。